

ほとくぼ小僧^{こぞう}

生まれ変わり^{うか}の勝五郎^{かつごろう}



● え ぶん
● 文

かのうちまさこ
叶内匡子

かつごろう

勝五郎生まれ変わり物語探求調査団

か

ものがたりたんきゅうちょうさだん



ほどくぼ小僧勝五郎かつごろう生まれ変わり

物語は、今から二百年くらい前の江戸時代に本当にあつたふしぎなお話です。元気な男の子だった程久保村の藤蔵とうぞうは、六歳のときに疱瘡ほうそうという恐ろしい病気になって、あつというまに亡くなってしまいました。

※程久保村：東京都日野市程久保

※疱瘡ほうそう：天然痘てんねんとうのこと



藤蔵が亡くなってから十二年たった
秋の日、程久保村から一里^{いちり}あまり離れた中野村で、八歳になった勝五郎が、お兄さんとお姉さんに、自分はこの家の子どもに生まれる前は、程久保村の藤蔵だったと話しました。お兄さんたちは、とても驚きました。

※一里…約四キロメートル



勝五郎の様子がおかしいのを心配した両親が、勝五郎に問いただすと、「おらあ、程久保の生まれで、おとうは久きゆう兵衛べえ、おかあはしづと言うんだ」と、前世の記憶を話しました。両親は、勝五郎があまり不思議な事を言うので、すぐには信じることができませんでした。



勝五郎は、おばあさんに、「お葬式
の日には、棺桶に入れられて、山の墓
地に運ばれたけど、棺桶をお墓の穴に
入れた時、ドスンというすごい音がし
て魂が抜けだしたんだよ」と、藤蔵が
死んでから、この家の子に生まれ変わ
るまでのことを話しました。藤蔵の魂
は家に帰りましたが、泣いていたおか
あさんは気がつかないようでした。



やがて、白いひげに黒い着物を着た
おじいさんに連れられて、山や川をふ
わふわと飛びまわりました。暑くも寒
くもなく、おなかもすきません。野原
には、赤や黄色のきれいな花が咲いて
いました。遠くで、お念仏を唱える声
が聞こえたので、家に帰ってみまし
た。誰も気がつかず、お供えしてある
ぼたもちの、あたたかい湯気が、とて
もおいしく感じられました。



あの世にいたのはほんの数日だった
ような気がしましたが、おじいさんか
ら「三年たったから、生まれ変わるの
だ」と言って連れてこられたのが、中
野村の勝五郎の家でした。藤蔵は言
われるままに家の中に入って、かまど
のかげで様子を見ていましたが、いつ
のまにかおかあさんのおなかの中にす
うっと入り、勝五郎になって生まれた
のでした。



勝五郎は、「ばあちゃん、おらあ程
久保村へ行ってみたいよう。おとつ
あんのお墓参りがしたいよう」と泣い
て頼みました。困ったおばあさんが、
近所の人に聞いてみると「久兵衛さん
は死んでしまったが、藤蔵という子供
がいてとてもかわいがっていたよ。だ
けど藤蔵も死んでしまったんだよ」と
話してくれる人がいました。



勝五郎が生まれ変わりの少年だとい
うことは評判となり、「ほどくぼ小僧」
というあだ名がつけました。

ある日、勝五郎とおばあさんは、思
い切って程久保村を訪ねてみることに
しました。程久保村は中野村の隣です
が、さびしい山道を越えていかなけれ
ばなりません。「勝や、この家かい」
「違う違う、もっと先の方だよ」

勝五郎は、来たことがないはずの道
をどんどん進んでいきました。

※中野村：東京都八王子市東中野



勝五郎が「この家だよ」と、一軒の農家へ入っていくと、確かにこの家には、六歳で亡くなった藤蔵という子どもがいたことがわかりました。

勝五郎の話したことは、すべて本当だったのです。家の人たちは、勝五郎が藤蔵によく似ていたので驚き、藤蔵が帰ってきたみたいだといって、喜びました。勝五郎は、初めてきたはずの家の中の事をもよく知っていました。



ある日、池田冠山^{いけだかんざん}という大名が、勝五郎の家を訪ねてきて、生まれ変わりのことを詳しく話して欲しいと頼みました。勝五郎が緊張してなにも話すことが出来なかったので、おばあさんが代わりに話をしました。

冠山は、その話を書物にまとめ、たくさんの友人に見せたので、勝五郎の生まれ変わりのことは、江戸中の評判となりました。



池田冠山のようなえらいお侍さんが、江戸から多摩の田舎にある勝五郎の家を訪ねてきたのは、露姫つゆひめという末のお姫様が藤蔵とおなじ疱瘡ほうそうにかかり、六歳のときに亡くなってしまったからでした。ちょうどその頃、勝五郎の生まれ変わりのうわさを聞いたので、「わたしの娘もどこかで生まれ変わっているかもしれない」と、いってもたってもいられない気持ちで、勝五郎を訪ねてきたのです。



露姫は、とても賢くやさしいお姫様
だったので、みんな露姫が大好きでし
た。毎日仏様に手を合わせ、浅草の浅
草寺には、よくお参りにいきました。
露姫が亡くなってから、おとうさんた
ちにあてた手紙が六通も見つかり、と
ても六歳の子どもが書いたとは思えな
い上手な字で書いてありました。



さて、勝五郎とおとうさんは、江戸に呼ばれ、中野村の領主りょうしゅや学者の平田ひらた篤胤あつたねからくわしい話を聞かれました。

篤胤はこれを「勝五郎再生記聞かつごろうさいせいきぶん」という書物にまとめ、都（京都）の天皇に見せたので、勝五郎の生まれ変わりのことは、都の人たちにも知られることとなりました。

その後、勝五郎は、平田篤胤の弟子となり、一年ほど篤胤の家で勉強しました。
※領主…村を治めていた人

当時の中野村の領主は多門伝八郎おかとでんぱちろうという人で、江戸に住んでいた



大人になった勝五郎は、中野村でお百姓をしながら、竹かごを作り、江戸へ持って行って売る仕事をしました。手先が器用で、商売も上手だった勝五郎は、豊かな暮らしをしたそうです。

明治二年（一八六九）に、五十五歳で亡くなりました。

勝五郎のお墓は、勝五郎が生まれた家の近くにありましたが、今は八王子の永林寺えいりんじというお寺にあります。藤蔵のお墓は、日野の高幡不動尊たかはたふどうそんにあり、どちらも、子孫の方が、大切に守っています。



明治二十三年（一八九〇）にアメリカから来たラフカディオ・ハーン（いすみやくも小泉八雲）という学者が、日本のことを書物に書いて海外に紹介してくれました。

八雲は、明治三十年に、勝五郎の生まれ変わりのことを「勝五郎の転生」てんせいという書物にまとめて、アメリカとイギリスで発表しました。

このことにより、日野で伝えられてきた生まれ変わりの物語は、世界中の人が知るお話となったのです。